

二条
ノ
后

杉本
苑子

二条ノ后



杉本苑子

南北社

二 条 の 后

著者との話し
合いにより検印
廃止

昭和 38 年 8 月 10 日 印刷

昭和 38 年 8 月 15 日 発行

著 者	杉 本 苑 子
発行者	大 竹 延
発行所	株式 南 北 社 会社

東京都千代田区飯田町1の16
振替口座東京50639番
電話(301)2860・(272)0730番

印刷 株式会社堀内印刷所
製本 高橋製本

乱丁・落丁はおとりかえします

¥ 320 〒 80

二
条
の
后

目
次

珠の段……………五

江戸から来た人……………七三

罨……………二三

みぞれ……………一四七

朝焼け……………一八五

癪くせ馬うま……………二三五

二条の後……………三三七

解説……………伊藤桂一………三三三

装幀・川田
幹

珠
の
段

一

ひかえの間に^まつづく板敷きの稽古舞台で、大店の^{おおどろ}通い番頭らしい中年ものが『船弁慶』のキリを^{さら}復習^{ふくしゅう}っていた。

露地^{ろじ}のつきあたりなどでたまに見かける^{すうたい}素謡、仕舞の^{しなんじょ}指南所である。

師匠は口もとにあいそ笑いを絶やしたことのない五十男……。稽古ぶりも甘く、いいかげんだが、数をあげるのが早いところから、しろうと弟子の受けはよかった。

昼食どきだというのに、今もひかえの八畳には、もうろく頭巾の町家の隠居と、前髪だちの武

家ふうな少年が順番を待っている。

江戸も山の手に近いこのあたりは、生垣がとりどりの縁をつづっている閑静なしもたや町だった。

師匠の家の縁先きからは、ぶどう棚をあしらった三坪ばかりの小庭ごしに稲荷の鳥居が見え、おかよ榎とよばれている神木をめぐって、法師蟬の降るような鳴き声と、それをねらう町内のわんぱくたちの、かん高いさけびが聞えていた。

「じき秋の彼岸だというのに、いつまでもお暑いこってすな」

団扇をつかいながら、隠居はおりおり話しかけるが

「ええ」

と、そっけなく答えるきりで、少年は身じろぎもしない。

たまご形のとけない輪廓、生ぶ毛の匂うやわらかそうな頬……ひと皮まぶたの、やや吊りあがり気味な眼のすみに、えもいえぬいろけと底意地の悪さがほの見えるほか、少年は眉も唇もぼうとかすんだ品のよい顔立ちをしていた。

金まわりもなかなかによいらしく、螢を散らした水あさぎの絹のふり袖に、紫びろうどの折り帯をしめ、金鐔のみごとな脇差しを刀掛けに横たえている。

「いやあ、すっかり汗になっちゃいました」

と、『船弁慶』をさらっていた通い番頭は、やがてひかえの間へもどって来、入れかわって少年が舞台にあがった。

「お願いします」

と、折りめ正しく、師匠へ小腰をかがめる……

「ええと、伊南さんはきょうは」

『海人』の珠の段です」

「そうそう、『涙ぐみて立ちしが』からでしたね。——では常座に立って下さい。そして正へッ
メて……開きながら合掌し……」

仕方をして示しながら

へなむや、志度寺の、観音薩埵の……

と、師匠は足拍子を踏んでみせる。

世話やきなたちとみえて、二つの湯呑みへ手まめに冷えた麦茶をつぎ分けながら

「番頭さん、ちよいと見ないまに、えらいご上達だね」

と隠居は、こんどは『船弁慶』の男に話しかけていた。

「これは、はばかりさま」

汗をふきふき

「ご隠居の前だが、私らの年から始めちゃあ仕舞はむりですね」

と、番頭は坐り込む……

「やっぱり、あの伊南さんぐらいの時からきた錬えとかなきゃ」

「あの前髪は」

と、老人は声をひそめた。

「伊南ってのかね？ 私やこのところ、つづけて夜分やぶんにばかり来てたので、逢うのははじめてだが」

「二十日はつかほど前から稽古に来てますよ。たしか、伊南数馬って名だっけ」

「逸品いつびんじゃないか」

「まったくね。十四か、たかだか五どまりだが、よほどよそで稽古を積んだ人と見えますね。私

らとは腰の入りが違いが違ふもの」

「そのはずさ。腰は晚ごと、使いなれているだろうからね」

と、齒のない口をすぼめて隠居は笑った。

——舞台では数馬が、師匠の謡に合わせて、どこかよわひ弱だが落ちついた舞ぶりを見せている。

上眼づかいにその姿をうかがいながら

「そんなのじゃありませんよ」

と番頭は小声で隠居をたしなめた。

「師匠に聞いたんだが、あの若衆は麻布へんの、ゆいしよある寺のお稚児だというこつてすぜ」

「坊主のお伽ですかい？ やれ、そいつあ可惜なもんだ」

「口が悪いね、どうも……。長老さまの給仕づとめつて触れ込みでさあね」

「わかるものかね、当節の子供衆は油断がならないからね。——それに、あれだけの子が、だもの、当人が堅くしていようと思つても、はたでほつては置きませんよ」

「そんなものですかね」

と、番頭はこっそり笑つて言つた。

「私やそつちのほうは、からきし暗いんだが、芳町だの湯島の天神裏あたりを歩くと、紅おしろいをつけた蔭間、色子が、ぞろぞろついてくるつて話じゃありませんか」

「でもね。伊南さん……ですかい？ 生地そのまま、あれだけのきり、ようを持った若衆は、芝居

者にもさらにはいませんぜ。まともに、あんなお子にぶちあたった者は災難ですよ。受け合い、われを忘れます。妄念に取つつかれて、身をほろぼす仕儀にもなりかねませんからな」

「おどかしっこなしですよ御隠居」

首をすくめてみせたが

「そういえば、訝おかしなことがあるんです」

ふっと番頭は真顔まがおになった。

「近ごろ、きまつて伊南さんの稽古の時刻になると、あのれんじ窓から編笠のぞが覗のぞくんですよ」

「編笠？ 侍ですかい？」

「露地の出はいりに、一度すれちがったことがあります、人品卑じんびんしからぬ若いお武家でした。

謡好きなのかと、初手しよては思っていましたかね」

言いさして、ふいに番頭は口をつぐんだ。含んでいた麦茶をむりやり飲みくでしたらしく、咽の

喉どぼとけがコクッと大きく鳴った。

「どうしましたえ？ 番頭さん」

湯呑みにのぼしかけていた手を止めて、隠居はけげんそうに相手をみた。

「噂をすれば影……き、来たんですよ」

「何が？」

「今の一件がさ」

皺首を、あわてて隠居もうしろへねじ向けた。舞台わきの小窓から編笠越しに、するどい視線を舞台の数馬へそいでいる人影がある……

「つづけざまに、七日めですよ」

と、すり寄って、隠居の耳へ番頭はささやいた。

「伊南さんに目をつけて通かよってくるんですぜ。きっと……」

「それごろうじ。ぶちあたった者は災難だと、たった今、私が言ったとおりじゃありませんか」

したり顔に、だが腹の中ではいくぶんの思いやりをこめた口つきで、老人は言った。

「数馬さんとやらも罪つくりなこった。——あのお武家は迷ってますよ。まちがいが起らなきゃいいがねえ」

いつのまにか子供たちは他の遊び場へ移ったらしい。稽古場のうちそとは、またもとの、眠けをもよおすような師匠の謡と、法師蟬の単調な鳴き声に占められていた。

二

朝顔の蔓が、乾からびたまま竹柵わくにからみついている変で、つもないれんじ窓なのである。

津田悠之助は、編笠を窓わくへ押しつけるようにしながら、伊南数馬の稽古ぶりへ眸をこらしていた。

謡曲や仕舞の知識を悠之助は持たないが、生前、金春流をたしなんでいた父の影響で、いま数

馬の習っている曲が、『海人』の一節らしいとはおぼろげながら見当をつけていた。『鵜飼』の鵜の段。『桜川』の網あみの段……

能には見どころ聞きどころを、とくに区切つてもてはやす場合があり、『海人』の珠の段もそのひとつなのである。

あらすじは――

たしか、こんな話だったと悠之助は記憶していた。

奈良朝のむかし。

海底に沈んだ宝珠を取り出させる目的から都の一貴公子が志度ノ浦の海人乙女にちぎりをこめ、子まで生ませる。

女は子への愛にひかされて竜宮におもむき、珠を盗むが、竜神に追われて進退きわまり、乳の下をかき切つて珠を傷口へかくす。竜神が血の匂いを忌むことを知っていたからである。

こうして、珠は無事に貴公子の手へもどるが、瀕死の海人は船上に引きあげられて息絶えるという筋である。

むろん、悠之助に、この曲の持つこまやかな哀歎、風趣までが、わかつうはずはない。ただ、
舞扇を逆手にさかて